

## 青年期におけるスピリチュアルペインの構成概念と 自殺念慮との関連

今 村 仁 美

### 1. 研究の意義・目的

近年、生きる意味を支える人間の根源的な領域をスピリチュアリティという概念でとらえられるようになってきた。WHO では、これまで人間の健康を身体的側面、心理的側面、社会的側面の良好な状態と定義してきたが、これに新たにスピリチュアルな側面を追加することが検討されている。スピリチュアリティは、すべての人が潜在的に持つものであり、特に人生の危機的状態に陥った時に、それがたましいの痛み（スピリチュアルペイン）となって表出するといわれている。それは「何のために生きているのか」「この苦しみに意味はあるのか」といった実存的な問いの形をとることが多く、このペインが最も顕著に表れるのは、自分の死に向き合う時であるといわれている。しかし、スピリチュアリティが人間にとって本質的な側面であるならば、終末期の人に限らず、すべての人にとっても同様に重要な概念であるといえる。従って、本研究では以下の2つを明らかにすることを目的とする。第1に、青年期の学生に焦点をあて、学生のスピリチュアルペインはどのような構成概念を持つのか明らかにすること。第2に、青年期の主な死亡原因である自殺を取り上げ、青年期のスピリチュアルペインと自殺念慮との間には関連がみられるのかを明らかにすることである。

### 2. 文献研究

V. E. フランクルによると、人間には人生をできるだけ意味あるものにしたいという「意味への意志」という欲求が備わっており、それが満たされなければ「実存的空虚感」を抱えてしまうという。本研究ではこの理論を援用し、スピリチュアルペインが人間の実存的な領域に関わる痛みであることをレビューした。

自殺念慮に関しては、日本の自殺を取り巻く現

状を概観し、次に青年期の自殺の特徴を明らかにするため、統計資料と先行研究を参照した。

### 3. 調査

文献研究を踏まえて以下の仮説 A、B を設定した。

仮説 A：青年期のスピリチュアルペインの構成概念は8つから成り、それらは「自己存在に対する不信」、「実存的空虚」、「価値・目的の喪失」、「死生観に対する悩み」、「孤独」、「罪責感」、「自己超越的態度の欠落」、「宗教的信仰の喪失」である。

仮説 B - 1：スピリチュアルペインが高いほど、自殺念慮も高い傾向にある。

B - 2：抽出されたスピリチュアルペインの構成概念が、自殺念慮に与える影響は因子によって異なっている。

B - 3：自殺念慮を測定する概念として用いられる「死にたい」と「自殺したい」は異なる概念である。

これらの仮説を検証するために質問紙を作成し、大学生を対象にアンケート調査を実施した。有効回答数は604（男性：284人、女性：315人、平均年齢19.6歳、SD=1.61）であった。

### 4. 分析結果

仮説 A を検証するため因子分析を行なった結果、青年期のスピリチュアルペインとして信頼性、妥当性の認められた構成概念は次の7因子であった。それらは、「第1因子：自己存在への不安」、「第2因子：実存的空虚」、「第3因子：信仰心の不在」、「第4因子：死の不安」、「第5因子：親密な関係性の不在」、「第6因子：価値基盤の揺らぎ」、「第7因子：罪責感」であった。

仮説 B-1、B-2 を検証するためにロジスティック回帰分析を行った。従属変数である自殺念慮については、「死にたいと思う」と「自殺したいと考える」の2種類で尋ねており、それぞれに対して分析を行った。

B-1 の分析結果は、スピリチュアルペインの尺度合計得点が、「死にたいと思う」に有意な影響を与えており（オッズ比：1.05,  $p < .001$ ）、スピリチュアルペインが高くなるほど「死にたいと思う」ことが明らかとなった。同様に、「自殺を考える」との間にも有意な関連がみられ（オッズ比：1.03,  $p < .001$ ）、スピリチュアルペインが高くなるほど、「自殺したいと考える」ことが明らかとなった。

B-2 の分析結果は、「死にたいと思う」に影響をあたえていたスピリチュアルペインの因子は、「自己存在への不安」（オッズ比：1.23,  $p < .001$ ）と「死の不安」（オッズ比：0.93,  $p < .01$ ）の2つの因子であった。一方、「自殺したいと考える」に有意な影響を与えていたスピリチュアルペインの因子は、上記の2つに加え、「親密な関係性の不在」（オッズ比：1.02,  $p < .05$ ）の3因子であった。これらから、スピリチュアルペインのなかでも「自己存在への不安」が高いことと「死の不安」が低いことが、学生の自殺念慮に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

B-3 については、「死にたいと思う」と「自殺したいと考える」の2変数間のクロス集計を行った結果、「死にたいと思う」が全体の24%、「自殺したいと考える」が全体の39%であり、2変数の分布の偏りに有意な差が認められた（ $p < .001$ ）。

また、死にたいと思っている人の大半は、同様に自殺したいとも考えているが、自殺を考えている人のうち約半数近くは死にたいとは思っていないことが明らかとなった。このことから、「死にたいと思う」と「自殺したいと考える」は別の概念であることが実証された。

## 5. 考察

青年期のスピリチュアルペインは、自己自身との関係において顕著に表出するという特徴がみられた。また、超越性との関わりについては、宗教

的な関わりの中で捉えられ、宗教をもたない大半の学生にとっては超越的な態度や視点を欠いたまま、自己と他者との関係性から、自己存在の根拠や人生の意味を追求しようとする傾向が明らかとなった。また、自殺念慮を持つ人は、死に対して不安や恐れを抱いておらず、むしろ死に対して親和的な態度をとることが確認された。このことから、学生にとって自殺は苦しみからの逃避の手段として衝動的に捉える傾向が分析結果から考察することができた。

## 5. 提言

これまでの自殺防止対策は主に心理的側面に着目して取り組まれ、スピリチュアルな側面は見過ごされてきた。しかし、本研究において、大学生にもスピリチュアルペインが存在し、自殺念慮との関連が確認されたことから、今後、自殺防止におけるスピリチュアルケアの可能性を探る必要がある。そのためには、援助者自身が、「生きる意味がない」等の人間存在の根源に関わる問いをスピリチュアルペインとして認識する視点が不可欠となる。そして、その痛みを取り除くのではなく、共に寄り添う姿勢が重要となる。また、教育機関の果たす役割として自らの死生観や宗教観、実存的な問いを扱うことのできる場を設けることが期待される。